

# 土木屋の読書と旅(9)

令和元年 11 月

「ポツンと一軒家」という人気 TV 番組がある。衛星写真から見つけた(たいていが山奥の)一軒家を地元の人々からの情報を基に探し訪ね、その一軒家の住人の生活の営みや住むに至った経緯を伺うという極めてシンプルな番組構成である。取材にタレントを使っていないことから進行に押しつけがましさはなく、昔の日本人(田舎の人?)は確かにこういう風に他人に接していたなあと素の人間性を再確認できるのが心地よい。なぜ人里離れた場所に住むのか、多くの住人が“自分の育った処<sup>ところ</sup>だから”というが、実に様々な生き方や物語があるものだと思う。

私の旅の楽しみ方のひとつは小説の舞台となった土地を訪ね、自分の読後感からくるイメージ(心象風景)と現実の場所の印象を照らし合わせてその差異を楽しむことであり、作家の文章力(小説の表現構成として如何なる要素を切り取っているのか)を楽しむことである。

『…宮崎県の丁度真ん中あたりに位置する S 市では、…人口三万人程度のこの小さな田舎町では、…米良街道という、九州山地を越えて熊本にまで至る古い道が市の真ん中を貫いているのがわかるが、行ってみると、実際、その通りの単純な構えの町である。…古代史の好きな人は、S 市と聞くと市内の巨大古墳群がすぐに思い浮かぶらしい。…後にその古墳群の公園の桜の樹だけは、特別な愛着の対象となるのだったが。』



地図を広げてみると、S 市=西都市、巨大古墳群=西都原古墳群であることがわかる。こういう場所設定から始まる小説がある。

\* \* \*

『ある男』(文藝春秋社)平野啓一郎:「日蝕」で芥川賞、「マチネの終わりに」がロングセラー。本の帯には、『愛したはずの夫はまったくの別人だった。その偽りは、やがて成就した本物の愛によって赦されたのであろうか? 愛にとって過去とは何か? 幼少期に深い傷を負っても、人は愛にたどりつけるのか? 「ある男」を探るうちに、過去を変えて生きる男たちが浮かび上がる。人間存在の根源と、この世界の真実に触れる文学作品』とある。この要約は必ずしも間違っているわけではないが、ロングセラーとなった恋愛小説『マチネの終わりに』を意識した、出版社の販売促進のように思えてしまうキャッチコピーである。これは決して恋愛小説ではない、人生のあり方を深く考えさせてくれる本である。



三島由紀夫の作品は「仮面の告白」「金閣寺」「憂国」の三冊しか読んだことのない私が言うのも心もとないが、平野啓一郎は「三島」の匂いがする作家である。複雑に入り組んだ状況や課題を手際よく整理して、明快に構成しており、「戸籍」「在日」「死刑囚」といったテーマの重さの割には読みやすい小説だと思う。そして隠れたキーワードは作者が説く思考の道具としての「分人主義<sup>ぶんじん</sup>」だと思う。

\*分人主義については、同著者の『私とは何か 「個人」から「分人」へ』(講談社現代新書)に詳しいので参考にすればこの小説も違った視点から味わえると思う。著者は『「個人(individual)」という言葉の語源は、「もうこれ以上分けられない(in+dividual)」という意味。これは人間の身体を考えてみれば、当たり前の話だ。では人格はどうだろうか?ここで「分人(dividual)」という新しい単位を導入。一人の人間は複数の分人のネットワークであり、そこには「本当の自分」という中心はない。私という人間は、対人関係ごとのいくつかの分人によって構成され、その人らしさ(個性)は、その複数の分人の構成比

# 土木屋の読書と旅(9)

令和元年 11 月

率によって決定される。私たちが生きている現実をどう整理すれば、より生きやすくなるのか? 「分人」という用語は、その分析のための道具だ。』と提起している。私には一時期流行ったアドラー心理学『嫌われる勇氣』よりも使える概念モデルであると思えた。

\* \* \*

即位礼の日、西都市を訪ねた。市内には奈良・平安時代の国府跡(寺崎遺跡)や国分寺跡が存在し、この地が古代日向の政治・経済・文化の中心地であったことが分かる。市街地北西部の小高い台地には九州最大の西都原古墳群が分布しており、その中心には最大の古墳、男狭穂塚、女狭穂塚がある。地元ではこの男狭穂塚は瓊瓊杵尊、女狭穂塚はコノハナサクヤ木花開耶姫の陵墓と古くから伝承されている。

「記紀」の神話では瓊瓊杵尊は天照大神の孫であり高千穂の峰に降臨し、三代後が神日本磐余彦尊(神武天皇)となる。木花開耶姫は市内の「都万神社」の主祭神であるとともに、起源は明らかではないが、富士信仰の中心地・富士山本宮浅間大社の主祭神でもある。「コノハナ(木花)」は桜の古名といわれ、祭神は富士山の美貌に由来するとされる。

「ある男」はS市で文房具屋の娘(里枝)と出会い、自分の過去を捨て去って、全く違う別人として新しい人生を生きだした。二人の間に生まれた女の子が「花」である。

今回の旅で訪れてみたかった場所は、「ある男」と里枝が出会った米良街道沿いの商店街にわずかに残った文具店(架空の設定かも?)と「ある男」とその家族の思い出の古墳群公園(の桜の樹)である。

カーナビの誘導に任せて西都 IC から R219 号を北上し、途中から街の中心部を最短ルートで抜ける。木立の中の緩くカーブする県道を上るとコスモスが広がる野原に円形の古墳が忽然と現れる。見渡しの良い台地の外縁をガイダンスセンターから考古博物館へ走る道路沿いに桜並木が続き、背景屏風のように低い山が鎮守の森のごとく一体化した男狭穂塚、女狭穂塚である。晴天に恵まれた祭日の公園は市民の格好の憩いの場となっている。四季を通じて春は桜と菜の花、夏は向日葵、秋は秋桜が咲き乱れる、南国の古墳群はあくまでも開放的で涼やかな公園であった。

帰路にあたって多少の不安がよぎった。往路では商店街が見当たらなかったからである。ナビに頼らず都万神社を経て米良街道を南下し道路沿いの商店街を探す。地図をよくみると旧鉄道駅の痕跡が読み取れる街路網があり、市役所のほど近くに、シャッター通りと化しつつある唯一の商店街を見つけた。ただ、南国特有の明るさの中では、旧駅前のシャッター通りには沈鬱さは全くなく、商店街の端に文房具店が確かにあった。著者はなぜこの町を「ある男」の再生の場にしたのだろうか。

西都市は令和の時代に神話の面影が“ポツンと一軒家”のように残る、青空の広がる南国の鄙びた町であった。

古谷 健

